夏幻 F a r e w e l l n i g h t

冴島鋼牙 (春雨・T・サラダ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏幻 Farewell night

【Nコード】

N1745N

【作者名】

冴島鋼牙（春雨・T・サラダ）

【あらすじ】

夏の日に出会った二人の短くてとても充実した日々

第1話 Orange sea

僕は、西口 健也、仕事の帰りに、海にたどり着いた。夏の夕方、日が落ちかけていて海はオレンジ色に染まっていた。

その日の夜、僕は財布を無くしたのに気づいた。そして次の日、僕は同じ海に来てみた。

健也「やっぱり見当たらないなあ。」

？「あー。」

僕は不意に後ろから呼ばれた、後ろには、白い服を着た少女が立っていた。

健也「なんか用ですか。」

？「あー、西口 健也さんですか。」

健也「はい、でもなんで僕の名前を。」

？「昨日財布を拾ったので、免許証が入ってたので。」

健也「ありがとう、探してたんだ、昨日落としたみたいで、本当助かったよ、君の名前は。」

トモ「高本 トモです。」

健也「トモちゃんありがとう。」

トモ「どういたしまして、ところで健也さんはいつもこの海に来てるんですか。」

健也「いや、昨日仕事帰りに海がきれいだったから、たまたま寄っただ。君はこの近くに住んでるの。」

トモ「近くに住んでいると言えばそうですね。」

健也「じゃあ、ここに来たらまた会えるね。」

トモ「はい、そうですね。」

僕は、彼女に一目惚れした。僕の顔は、海の色みたいにオレンジになっていた。

それから僕は、毎日この海に行った。彼女とは会えるときと会えないときがあった。

トモと出会って三ヶ月、僕は思いきって、告白した。

健也「トモちゃんは好きな人っているの。」

トモ「いないけど。」

健也「僕とつき合ってほしいんだ、君と初めてあったときから君のことが……。」

トモ「だめ、それ以上言わないで。」

トモはそついつと走り去っていった

第1話Orange sea(後書き)

ガチで恋愛もの書きました。

第2話 White truth

僕は、親友の和と文明とやけ食いしてた。

健也「なんだよ途中までしか言っただめだつてよ、俺本気で・
・・」

和「お前さー、泣くか喋るかのどちらかにしろよ。」

文明「で、お前はそのトモちゃんという人がまだ好きなのか？」

健也「当たり前だよ。」

和「だったら、俺達も一緒に行つてやるから理由聞いてみよっぜ。」

健也「でもなあ。」

文明「分かった、代わりに俺が聞いてやるよ。」

次の日、僕たち3人は海に来た。

文明「こんにちは、君がトモちゃん？」

トモ「はい、あなたは？」

文明「健也のだちで、文明って言います、ちょっと話し、いいですか、

おい和と健也、自販機行つて缶コーヒーかなんか買ってこいよ。」

和「ああ、おい健也行くぞ。」

健也「エツちよっと。」

和「いいから。」

健也「なあ、何で二人にするんだ。」

和「ちよっと待てすぐに分かるから。」

プルルル

和「オツ来た来た、健也よく聞けよ。」

文明「じゃートモチちゃんは、健也のことは好きなんや。」

トモ「はい。」

健也「二人の会話か？」

和「ああ、文明のポケットに携帯を入れて二人の会話が聞こえるようにしておいたんだ、

お前がいるとトモチちゃんも言いくいだろつと想ってな。」

健也「そういうことが、サンキュー。」

文明「じゃあ何で、健也の事断わったん。」

トモ「実は、私、病気で後1年しか生きられないんです、だから、健也さんには悲しい思いさせたくなくて。」

ガタン、僕は思わず缶コーヒーを落とす。

その音に気づいた二人がこっちを振り向いた。

文明「あっ健也、聞いてたのか、じゃあ後は二人で話しな、俺達帰るわ、ほな。」

トモ「聞いてたんですか？」

健也「ごめん全部聞いてたんだ。」

トモ「あそこに病院見えるでしょ、あそこに入院してるんです、だから少しの時間しか外にでれなくて。」

僕は、つらくてトモの顔を見れなかった。二人の間を沈黙がよぎった、するとトモが切り出した。

トモ「私、健也さんのこと好きです、でも私には後一年しか残ってないんです、だから・・・」

僕は、何か言い出しそうなトモを思わず抱き寄せた、そしてこう言った。

健也「君の人生の半分を僕にわけてほしい、君を一生愛してみせる、だから、僕と付き合ってほしい。」

トモ「ホント？」

健也「ああ、君がよければ、僕と。」

トモ「嬉しい。」

それから、僕とトモの駆け足のような日々が始まった。

トモは入院していたので僕は毎日、トモの病室に見舞いに行っていた。

そしてトモから初めて、トモの主治医が、実の兄と言うことも聞かされた、

そしてある日、いつものように見舞いの帰りに不意に、トモのお兄さんに呼び止められた。

兄「君が、見舞いに来てからトモが明るくなったんだよ。」

健也「ところで、お兄さん、トモの病気はどれほど進行してるんですか。」

兄「もつて、今年の秋まで、もしくはもつと早くなるかも、いやしかしね、両親が早いこと死んでしまつて私とトモの二人きりで、

トモにだけは幸せになつて欲しかった、だが、トモにはもう時間がない、

そこでだ、健也君、君に頼みたいことがあるんだ。」

健也「はい、何ですか。」

兄「今度一日、トモに外出が与えられるんだ、そこでトモが行きたいと思つている場所に行かせてあげたいんだ。」

健也「はい、分かりました。」

健也「トモちゃん、どこか行きたい。」

トモ「どこでも良いです、健也さんが決めて下さい。」

健也「じゃあ、山にでも行こうか。」

トモ「はい、楽しみです。」

健也「じゃあ今度一緒にいこうね。」

僕はトモと約束をした、最初で最後になるかもしれないデートの約束を

第2話 White truth (後書き)

もう一話も一挙投稿。さて第3話はどうなるのか。
ぜひぜひお楽しみを

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1745n/>

夏幻 Farewell night

2010年10月15日23時50分発行